

〔書評〕

萱場真仁著『林政史ブックレット・尾張藩の林政と森林文化10

木材生産を支える人びと』

脇野 博

はじめに

本書は、徳川林政史研究所が平成三〇年度から取り組んでいる岐阜県中津川市加子母地区における史料調査の研究成果を、尾張藩の森林政策や山村の生活文化などのテーマに分けてわかりやすく紹介したブックレットシリーズの一冊である。尾張藩が有していた広大な森林地帯である木曽山（信濃国筑摩郡＝現在の長野県塩尻市・木曽郡など、美濃国恵那郡＝現在の岐阜県恵那市・中津川市など）のうち、いわゆる裏木曽三ヶ村と呼ばれてきた濃州恵那郡の地域（加子母村・付知村・川上村）の史料を中心に考察した成果の発表であり、またブックレットという体裁をとっているものの、木材生産分野における木曽林業史の現時点での到達点を示している書である。

木曽林業史研究はこれまでに多くの成果を生み出してきた。その代表的な研究書は所三男著『近世林業史の研究』（吉川弘文館、一九八〇年）である。

この所氏の著書は木曽林業を日本林業史のなかに位置づけ、木曽林業につ

いて支配から生産（育林・伐採）まで総合的に究明し、木曽林業の全体像を示した。そして、所氏著書の以前と以後には多数の個別論文や著書が存在し、木曽林業史は日本林業史研究においてその中心となり、木曽林業史が基準になって日本林業史が語られてきたと言っても過言ではないであろう。

しかし、これまでの様々な木曽林業史に関する豊かな成果は、残念ながらとに所氏著書と有機的に関連付けられることは少なく、木曽林業を網羅的にかつその総体を描き出そうとする試みはなかったと言えよう。

そのようななかで本書は、所氏著書から半世紀近くたった今、これまでのばらばらであった木曽林業史の成果をとりまとめ、近世木曽林業における木材生産の全体像を把握するための一歩となる労作である。

本書の構成と目的

本書は次の通り3つの章から構成されている。

プロローグ

1 木材の伐採と搬出

(1) 木材生産と林政の展開

(2) 木曾式伐木運材法

2 木材生産に携わる人びと

(1) 杣・杣頭とは：

(2) 濃州三ヶ村の杣頭たち

3 御山守内木家と杣頭たち

(1) 杣頭の仕事と生活実態

(2) 杣頭たちによる森林利用

(3) 伐採事前調査への動員

エピソード

本書は徳川林政史研究所が取り組んできた史料調査の成果であることは前述したが、その史料とは江戸時代に尾張藩の「御山守」を代々務めてきた内木哲朗家の三万点に及ぶ史料である。内木家は美濃国恵那郡加子母村（現岐阜県中津川市加子母地区）を開いた草分け百姓で、元和元年（一六一五）に同村が尾張藩領になって以後百年余り同村の庄屋をつとめ、享保一五年（一七三〇）からは尾張藩の役職である「三浦・三ヶ村御山守」を代々つとめた。この御山守は信濃国筑摩郡王滝村（現長野県木曽郡王滝村）の三浦山と裏木曾三ヶ村（加子母村・付知村・川上村）の山々のうち藩の直轄林である「御山」「御林」を管理した役職であった（林政史ブックレット第1巻）。

さて、徳川林政史研究所は木曾林業に関する膨大な貴重史料を所蔵し公開してきた。これらのうち近世の木材生産や村方の様子を具体的に知ることができるとは、これまでは信濃国筑摩郡王滝村の松原家文書であっ

た。所氏も松原家文書を駆使して木曾林業について解明し、また同文書は日本林制史調査資料や長野県史に収録されており、木曾林業史研究の基礎資料といってもよいものであった。評者も数十年前に木曾の杣と日用の実態について研究していたときに、当時は未整理の史料が多かったため限定的ではあったが、原文書を閲覧させていただき実態解明に多くの示唆を得た。しかしながら、松原家文書だけでは実態解明が難しい事柄もあり、そのことは近世の木材生産を主とした木曾林業史研究を停滞させる一因であったかもしれない。

こうしたなかで、内木家文書の調査が始まり、木曾材木役所など藩の役所からの通達や、村の百姓たちからの森林利用の願書とそれを藩に取り次ぐための内木家作成の書状などを書き留めた「内木家御用状留」（元文五年〔一七四〇〕～慶応二年〔一八六六〕までの九五冊）による考察とPDFファイルによる公開が進められていることは、木曾林業史研究を新たな段階に引き上げる契機となると思われる。内木家文書の考察は、次のようにすでに刊行された一一冊の林政史ブックレットにも反映されており、そのタイトルを見ると尾張藩の森林政策や山村の森林利用・生活文化の様子が明らかにされつつあることがわかる。

第1巻 御山守の仕事と森林コントロール

第2巻 山村の人・家・つきあい―江戸時代の〴〵かしも生活①

第3巻 尾張藩林政のなかの御山守

第4巻 四季折々の暮らしと文化―江戸時代の〴〵かしも生活②

第5巻 森林利用の秩序と御山守・村

第6巻 自然の脅威と樹木の活用

第7巻 子どもから大人へ―江戸時代の〴〵かしも生活③

第8巻 明治維新と加子母の森林

第9巻 人・物・お金にみる山村の暮らし―江戸時代の暮らしも生活④

第10巻 木材生産を支える人びと

第11巻 加子母村の朝・昼・夜―江戸時代の暮らしも生活⑤

第10巻である本書は、これまでの内木家文書の調査と考察の成果を踏まえ、御用材伐採を担った柚や榎を統率して伐採事業を請け負った柚頭たちに注目して、彼らの生活と仕事について具体的に考察し、尾張藩が有した木曾山における木材生産の実態のさらなる解明を進めることを目的にしている。

1章「木材の伐採と搬出」

まず本書の「プロローグ」では、加子母村の林業従事者数が示されている。万延元年（一八六〇）における同村人口は二七八四名で、木々の伐採の担い手である柚と運材の担い手である日用と呼ばれる林業従事者が三二五名おり、その男性人口（一四五〇名）に占める割合は約二五パーセントであった。このように幕末期の加子母村では村内男性のおよそ四分の一が林業従事者であったが、この割合が日本有数の林業地帯と言われてきた木曾山林の山村としては多いのか少ないのかは気になるところではある。しかし、まずは考察対象である林業従事者が生活・生産の場である村落においてどの程度の比重を有していたかを明確にしたおくことは、やはり大事なことであろう。もし一パーセント程度であったなら、そもそも林業という面から分析する意義があるのかということにもなりかねないからである。

さて、1章においては最初に、江戸時代の木材生産の様相と林政の展開

という近世林業史の全体としての流れについて述べ、近世初期の大規模な森林伐採とそれに伴う木材流通機構の整備、そして森林資源渇渇による一七世紀半ば以降の森林資源保護政策の推進という、従来からの通説が紹介される。そして、木曾林業もこの流れとは無縁ではなかったが、木曾山周辺地域で独自に成立した「木曾式伐木運材法」という林業技術の存在が木曾林業の特色として紹介される。

本書では、木曾式伐木運材法を現代に伝える資料である「木曾式伐木運材図絵」の成立過程が、これまでの研究成果に基づいてまとめられている。飛騨国（現岐阜県）の伐木・運材の様子を描いた「官材画譜」が嘉永六年（一八五三）に完成し、木曾式伐木運材図絵はこの画譜をもとに明治一〇年代に作成されたといわれている。また、もともと飛騨の伐木・運材法を描いた絵図に木曾式という名称が付けられた経緯については、いつから木曾式と呼ばれるようになったのかは定かではないものの、後世に付けられた呼称であり、飛騨と似たような地形である木曾山にも飛騨の伐木・運材法が当てはまると考えられたことから、木曾式と呼ばれるようになったのではないかと指摘されている。

評者も以前に木曾式伐木運材図絵を用いて近世木曾の林業技術について考察したことがあるが、今回本書を読み、あらためて木曾式伐木運材図絵について考えさせられた。飛騨の山と木曾山が隣接して似たような地形であるとはいえ、両者同等の技術であると即座に考えてよいのであろうか。やはり史料批判の立場から、両者の関係を再検討することが必要なのではないかと思われる。そもそも、木曾式伐木運材法という呼称自体が、木曾式伐木運材図絵を作成する際に官材画譜にどのような名称をつけようかという検討のなかから生じたのではないかと思われ、管見の限りでは木曾式

伐木運材法という呼称は近世期には見られなかった。木曾式伐木運材法という呼称から、近世の木曾山にはすでに完成された体系的な伐木・運材技術が存在したと思いがちであり、評者もこれまでこのように考えてきたが、この点についても再考の余地があるのではないであろうか。近世の伐木・運材技術は一見体系的に見えても、その場その場に応じた個別技術の集合体でしかなかったのかもしれない。

2章「木材生産に携わる人びと」

尾張藩領の木曾山では、伐木と製材を担当していた杣、製材した木材を川まで下げる搬出を主に担当した日用（日雇）があり、伐採と運材は分業化されていた。両者は杣組と日用組に組織され、杣頭や日用頭が統率していた。杣組や日用組は御用材伐採がおこなわれるごとに結成され、作業が終了すると解散した。杣組は一組につき一二〜一五人、日用組は一組につき三〇人程度で組織されることが多かった。

木曾山の杣と日用については、これまでも多くの研究成果があり、仕事の内容や雇用のされ方などが明らかにされてきたが、杣・日用と杣頭・日用頭の関係（地縁的なつながりや固定的なつながりがあったのかどうかなど）、杣・日用の村落における生活（百姓身分との関係や耕作はしているのかどうかなど）、杣・日用はどのようにして伐採・運材技術を身につけるのかなど、杣・日用の実態はいまだ十分解明されたいと言いつつ難しかった。

本章ではこうした杣・日用の未解明な実態の解明に取り組んでいる。杣・杣頭の身分について、杣頭が杣頭株を有していたことは従来から知られていたが、杣頭株とはどのような性格のものなのかについては不明で

あった。このことについて、本章では杣頭が藩（木曾材木役所）から与えられる名目であること、この名目を名乗れなくなることによって生活に支障をきたすことが明らかになった。しかし、杣頭という名目はどのような権利や権限を有していたのか、株であるとするならば株仲間のような排他的な同業者組織があつて株数が制限され、かつ株を得るためには村内での一定の地位や上納金のような負担が必要であつたのかなどは未だ判然としないうことから、今後さらに具体的解明が待たれるところである。

また、落札によつて請け負つた御用材伐採において「代人」という者が配置される場合がある。この代人についてはこれまでもその内容がよくわからなかったが、本章では請頭（伐採を請け負つた杣頭の稼行中の肩書き）の判断や決定を補佐する山仕事に精通している者であることが明らかになった。このように御用材伐採事業の運営においては請頭以外の杣頭や日用頭も関わっており、地域の杣頭・日用頭の集団によつて御用材伐採が支えられていたことがわかる。

内本文書から濃州三ヶ村（著者は裏木曾三ヶ村を本書ではこう呼称している）の杣頭について考察した箇所においては、一八世紀後半に三ヶ村の各村に一〜三名ほどいた杣頭の様子が紹介されている。

川上村の喜兵衛・三吉は連名で登場することが多いことから、親子らしいこと。付知村の清助は高齢で山のことにはそれほど精通しているわけではないため、王滝村の杣頭利兵衛にたびたび代人を依頼しており、生活費を補うために頻繁に林産加工品を生産していたらしいこと。加子母村の二代にわたつて杣頭を名乗っていた助左衛門・利左衛門は身分としては村の百姓であり、両者は山の事情に精通していたこともあつて木曾材木役所からの信頼が厚かつたこと。また、利左衛門は御用材伐採の業務や出願に関し

ては杣頭を名乗り、村の問題などに関しては組頭を名乗っていたこと。

これらのことから、杣頭は百姓身分の者が名乗る肩書きで職人身分とは異なっていたこと、杣頭は親から子へと引き継がれる場合があったことや山の事情に精通していたものばかりではなかったことがわかり、杣の実態解明に向けての大きな手がかりを得ることができたといえよう。

3章「御山守内木家と杣頭たち」

杣・日用の伐採・運材工程については、これまでの研究成果によっておおよそは明らかにされてきたが、各工程の詳細で具体的な仕事の内容や杣・日用が果たす役割は未だ不明な部分が多く、その解明が待たれてきたもとで、本章では伐採手続きや杣頭の仕事と生活実態が明らかにされる。

紹介されている御用材伐採の事例によれば、伐採対象の山が藩によって選定され、入札実施前に村々に事前通知が行われた後、三月初めに入札が告知され、それに応じて杣頭が入札を開始し、五月中旬に杣頭の伐採請け負いが決まる。六月初旬から七月中旬にかけては木曾材木役所の山手代が伐採対象樹木の検査を行って伐採する樹木を選定し、御山守が立ち会って確認印を打刻し、伐木から搬出までの作業が終り杣・日用が下山してから残された株木にまた確認印を打刻する。このように、御用材伐採は杣たちによる伐採・運材作業が始まるまでかなり時間をかけて入念に準備が行われたことがわかるが、この準備の間に杣頭や日用頭はどのように関わっていたのかを知りたいところである。

また、本章では杣頭の生活を支える収入についてもその実態を明らかにしている。杣頭は雇入れた者たちに支払う前金や伐採に係る諸費用は自己

負担であったこと、御用材伐採の実施は不定期であったことから、杣頭の仕事だけでは安定した収入を得られる保障がなかった。そのため、自分の耕作地を質に入れたり、借金することも多々あり、杣頭は苦勞することが多い仕事であったという。そして、御用材伐採だけでは生活できない場合は、森林利用を藩に願ひ出て林産加工品の生産によって収入を得ていた。木曾の杣頭といえは御用材伐採を専業としていたと思いがちであるが、必ずしもそうではなかったことがわかるとともに、収入補完のために御用材伐採とは別に林産加工品の生産にも携わっていたことから、杣頭の主要な生業は林業なのであろうか。そうであるとすると、杣頭が百姓身分であり耕作地を有していたこと、つまり農民としての性格はどのように位置づければよいのであろうか。農業の合間に林業を行う農閑渡世ではなく、林業の合間に農業を行うといわば林閑渡世ともいふべき存在なのかもしれない。このことは木曾の年貢は木年貢であるといわれてきたことと合わせて、今後の検討課題であらう。

本章では最後に、杣頭が森林の状況を把握しやすい立場にいたことから伐採事前調査へ動員されたことを紹介している。動員された杣頭たちは大材調査のために現地に赴いて、五尺廻り以上の木（外周が一メートル五〇センチメートル以上の木）の樹種や木数を調査した。これは、杣頭の森林状況把握に関する能力を具体的に知ることができるたいへん貴重な事例であり、今後もしこうした事例が発掘されることを期待したい。

おわりに

本書は近世木曾林業史における木材生産分野について、今後の研究の基

点になるとともに、これから解明すべき方向性を示したといえよう。そこで、本書はブックレットという体裁をとっていることは承知の上で、勝手ながら評者が感じた今後の大筋における課題とでもいうべき点を次ぎに記しておきたい。

第一は、運材を担う日用についての解明である。近世の木材生産において生産の成否を左右する要素は運材であると評者は考えており、特に木曽林業では峻険な山岳から大材を運び下ろしてくるという工程の比重が高いと思われるので、木曽における日用についての解明は柚同様に重要である。また日用は柚とは異なる性格を有するため、柚頭や柚に関する理解すべてをそのまま敷衍することはできないであろう。柚に比べて日用に関する史料は余り残されていないかもしれないが、今後の追究に期待したい。

第二は、近世の木材生産の復元である。木曽山においては森林資源がどれくらいあり、どれくらいの木材が生産されていたのか、また生産は誰がどのようにして行っていたのかについて、その全体像を知りたいということが評者の願いである。これらについては未だ不明なもの、個別的ではあるが解明されているものなど様々であるが、これまでの成果を統合しながら、新たに解明するものを加えながら、まずはある特定の時期、あるいは特定の場所について、木材生産の復元を試みてはどうであろうか。本書はその出発点となり、本書以外の林政史ブックレットの内容を統合することによって復元の基盤ができるのではないかと感じている。著者の萱場氏と徳川林政史研究所の今後の研究活動に大いに期待したい。

(A5判、五九頁、徳川林政史研究所、二〇二五年三月刊、

非売品であるが徳川林政史研究所HPで公開)